

『大寒林陀羅尼』 *Mahāśītavatī* について

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程3年

園田沙弥佳

本論文においては、『五護陀羅尼』 *Pañcarakṣā* とよばれる5つの陀羅尼經典のうち、『大寒林陀羅尼』 *Mahāśītavatī* について取り扱い、本經典の特色について明らかにしたい。

『五護陀羅尼』とは、『大随求陀羅尼』 *Mahāpratisarā*、『守護大千国土經』 *Mahāsāhasrapramardanī*、『大孔雀陀羅尼』 *Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』 *Mahāśītavatī*、『大護明陀羅尼』 *Mahāmantrānusāriṇī* の5種の陀羅尼經典が集合したものである。初期密教經典において陀羅尼は受持、読誦するための語句であった。

『大寒林陀羅尼』は、ラーフラ尊者が大寒林の墓場において苦悩を受けていることの説明から始まる。精神的、肉体的に様々な障りを受けて悩んだラーフラ尊者は世尊のもとを訪れ、ただただ涙を流した。世尊はラーフラにどうして泣いているのか理由を尋ね、ラーフラはその胸中を世尊に打ち明けた。それを聞いた世尊は様々な障りを防ぐための陀羅尼呪である「寒林陀羅尼」をラーフラに授ける。

和訳に際しては岩本裕氏が校訂したサンスクリット校訂本と、サンスクリット写本、漢訳、チベット語訳を使用した。

(キーワード)

インド後期密教, 五護陀羅尼, 『大寒林陀羅尼』, 『マハーシータヴァティー』, ラーフラ

1. 『五護陀羅尼』における『大寒林陀羅尼』

本論文においては、『五護陀羅尼』 *Pañcarakṣā* とよばれる5つの陀羅尼經典のうち、『大寒林陀羅尼』 *Mahāśītavatī* について取り扱う。

インド密教では『大寒林陀羅尼』の他に、『大随求陀羅尼』 *Mahāpratisarā*、『守護大千国土經』 *Mahāsāhasrapramardanī*、『孔雀王呪經』 *Mahāmāyūrī*、そして『大護明陀羅尼』

*Mahāmantrānusāriṇī*の5種の陀羅尼經典を、一つのグループとして『五護陀羅尼』と呼ぶ¹。

陀羅尼 (dhāraṇī) は、密教において一般に呪文の一種として考えられ、初期の大乗經典の一つである『法華經』²にも憶持の他に除災や守護呪としての陀羅尼が説かれている。初期の密教經典の大部分の陀羅尼は、例外を除いたそのほとんどがそれらを受持、読誦することによって様々な現世利益を期待する呪文と見なされていた³。

『五護陀羅尼』に属する各陀羅尼はそれぞれ別個に成立したと考えられ、原形の成立が最も古い文献は『孔雀王呪經』、最も新しい文献は『守護大千国土經』であるといわれている⁴。これらの陀羅尼經典もまた、様々な現世利益について説く⁵。

『五護陀羅尼』の中で、『孔雀王呪經』および『守護大千国土經』は岩本裕氏によって和訳されているが⁶、『大随求陀羅尼』⁷、『大寒林陀羅尼』、『大護明陀羅尼』⁸については未だ和訳がなされていない。『五護陀羅尼』のうち、本論文においては『大寒林陀羅尼』に関して、その内容と特色について考察する。

2. 『大寒林陀羅尼』の内容構成

本論文で取り扱う『大寒林陀羅尼』の概要は、以下の通りである。ラーフラ尊者が大寒林(屍林)において苦悩を受けていることの説明から始まる。様々な障りを受けて悩むラーフラ尊者は世尊のもとを訪れ、ただただ涙を流した。世尊はラーフラ尊者にどうして泣いているのか理由を尋ね、ラーフラ尊者はその胸中を世尊に打ち明けた。それを聞いた世尊は、諸々の障りを防ぐための「大寒林」と呼ばれる陀羅尼をラーフラ尊者に授ける。

『大寒林陀羅尼』のサンスクリット・テキストの成立年代は明らかではない。漢訳は南朝宋(A.D.420-479)法天訳の『大寒林聖難拏陀羅尼經』(大正蔵21、No.1392)に相当する。大塚氏(2010, 147-169)によると、『大寒林聖難拏陀羅尼』は曇無蘭(訳出活動年代A.D.381-395)訳の『檀特羅麻油述經』⁹の影響を受けており、原典成立はインド・グプタ朝期の4Cまで遡れるという。したがって『大寒林陀羅尼』の成立時代もその頃と推測される。

漢訳にあらわれる「寒林¹⁰」とは、「死体置き場」「火葬場」の意味であるという¹¹。ここであらためてサンスクリット原題の*Mahāśītavatī*について検討すると、mahāを「大」、śītaを「寒」、vatīを「～を持つ」とし、全体で「大いなる寒さを持つ者」と解釈することが出来る。一方、サンスクリット・テキストの『孔雀王呪經』において「シータヴァナに幸いあれ、マハーシータヴァナに幸いあれ¹²」という呪がある。vanī (vanaの女性形)であれば「森」や「林」と訳出することが可能であり、*Mahāśītavani*から*Mahāśītavatī*に転じた可能性が考えられる。

また、漢訳経題の「難拏」(nanda)は「歓喜」の意味といい¹³、この「大寒林」と呼ばれる陀羅尼を授けられたラーフラ尊者やその場にいた一切の者が歓喜したことから、そのように名づけられたと推察される。しかしながら、後述するサンスクリット訳、漢訳に内容が相

当するチベット語訳の経題では *'phags pa be con chen po zhes bya ba'i gzungs* 『聖なる大きな杖と呼ばれる陀羅尼』とあり、be con (杖) に相当するサンスクリットの *daṇḍa* が漢訳で「難拏」と音写された可能性もあると思われる。

そもそもこの『大寒林陀羅尼』のチベット語訳については、以下の問題点が指摘されている¹⁴。

同名のチベット語訳として北京版(大谷) No.180とデルゲ版(東北) No.562 *bsil ba'i tshal chen po'i mdo* 『大寒林陀羅尼』があげられる。しかしながら、このテキストはサンスクリット・テキストや漢訳と比較すると分量が多く、内容に関しても陀羅尼呪が説かれることは共通しているが、説かれている呪の記述が異なっている。

一方で、経題は異なるものの内容がほぼ一致するチベット語訳には、北京版No. 308およびデルゲ版No.606 *'phags pa be con chen po zhes bya ba'i gzungs* 『聖なる大きな杖と呼ばれる陀羅尼』が挙げられる。本論文で『大寒林陀羅尼』の内容構成について述べるにあたり、岩本裕氏が校訂したサンスクリット校訂本(岩本1937)を基に、チベット語訳には以上の北京版No. 308、デルゲ版No.606、漢訳は大正新脩大藏經No.1392を参考にした。以下にその概要について述べる。

表.1 『大寒林陀羅尼』内容構成¹⁵

[0] 帰依文	[3] 寒林陀羅尼
	[3.1] 目的
[1] ラーフラ尊者の苦悩	[3.2] 陀羅尼前半部
[1.1] 寒林における障り	[3.3] 陀羅尼後半部
[1.2] 世尊への謁見	[3.4] 陀羅尼の保持と効能
[2] 世尊の問いかけ	[4] ラーフラ尊者たちの歓喜

[1] ラーフラ尊者の苦悩

はじめにマハーシータヴァティーに対しての帰依文が記された後、ラーフラ尊者が大寒林において受けている様々な苦しみについての背景が説明される。具体的には、デーヴァ(天)、ナーガ(竜)、ヤクシャ、ラクシャサ等の障り (*graha*)¹⁶や、トラ、カラス、フクロウ、虫、そして人や人ではない者¹⁷等によってラーフラ尊者が傷つけられていることが述べられている ([1.1])。

ラーフラ尊者は世尊のもとに赴き3度右繞した後、世尊の前で涙をこぼした ([1.2])。

[2] 世尊の問いかけ

そこで世尊は、ラーフラ尊者に対して「どうして涙を流すのか」と問いかけ、ラーフラ尊者はその胸中を打ち明けた。ラーフラ尊者の苦悩を聞いた世尊は、次に「大寒林」と呼ばれる陀羅尼を授ける。

[3] 寒林陀羅尼

世尊は、四種の聴聞者（比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷）や、一切衆生を大寒林陀羅尼による覆いで守護し、守護呪の効能で長期にわたって財、利益、楽、繁栄をなし続けるため、次に述べる大寒林陀羅尼を記憶し、その陀羅尼を身体に結びつける（bandha）ようにと説いた（[3.1] [3.2] [3.3]）。

大塚（2010, 150）によると、以上のような陀羅尼を身体に結び付けるといった呪術的行為（結呪作法）は、呪文を唱えて諸天、諸鬼神に祈り、守護のために護符を身に付けるといったヒンドゥー教の民間信仰に根差したものであり、仏教教団においても3～4Cの頃にはこの呪術行為が表面化していたという。

次に陀羅尼を手や首に結び、結界を張って場を守護し、塗香、花、印契によって供養することが述べられる。続いてこの陀羅尼によって、武器、毒、病氣、呪い、ヴェーターラ（屍鬼）¹⁸、火、毒水等の害がなくなるといった現世利益的な効能について説かれる。また、害をなすものに対して「額がアルジャカの花房のように7つに裂けるだろう（頭破作七分）」といった句が述べられる¹⁹（[3.4]）。

[4] ラーフラ尊者たちの歓喜

世尊は以上の陀羅尼を説き、ラーフラ尊者をはじめその場にいた一切の者、デーヴァ、人間、アスラ、ガンダルヴァを伴う世間は大いに歓喜した²⁰。

以上が『大寒林陀羅尼』の内容である。

3. 『大寒林陀羅尼』の特色

『大寒林陀羅尼』に説かれる陀羅尼の特色は、以下の通りである。

冒頭に、ラーフラ尊者が世尊にデーヴァ、ナーガなどによる障害と、トラ、カラスなどによる苦痛が述べられている。それぞれのテキストを比較すると説かれている鬼神や動物などの種類や順序に相違点はあるものの、いずれも身体や心における様々な悩みについて述べられていることが共通している。

ラーフラに対し世尊は、この陀羅尼を身体に結びつけることによって自身および四種の聴聞者や一切衆生すべての立場の者は、長期にわたってあらゆる方面から守られると説く。具体的な功德としては現世利益的な性格が強調されており、財、利益、繁栄をなし、楽を与えるほかにも、王、賊、武器、杖、斧、毒、水、火、災害といった難を防ぎ、死、争い、不浄を鎮め、一切の恐怖、戦慄を取り除くという。さらに熱病などの一切の病氣や呪いからも保護し、人や人ではないものは現れなくなるといった守護的機能や、障りをなす者の額をアルジャカの花房のように7つに裂けるという「頭破作七分」の例えが説かれている。

また、手やのどといった身体の各所に大寒林陀羅尼を結びつける際に「塗香」、「花」、「印

契」、テキストによってはさらに「灯明」や「杖」を用いて（守護を）なすべきであると説かれており、それらを用いて供養をし守護を祈願するものと考えられる。具体的な供養の対象は明らかではないが陀羅尼經典を供養する行為と考えられ、後に陀羅尼が神格化される過程の片鱗がここであらうかがえる²¹。

今後の課題として、以上の『大寒林陀羅尼』と経題は同じであるが内容が異なるといわれているチベット語訳北京版No.180、デルゲ版No.562の *bsil ba'i tshal chen po'i mdo* を比較、検討し、『大寒林陀羅尼』の經典の特色や発展についてさらに明らかにしたい。

4. 『大寒林陀羅尼』和訳

0) 略号

・サンスクリット校訂本

IW: Iwamoto, Yutaka. 1937b. *Beitrage zur Indologie ; Heft 2 KLEINERE DHĀRAṆĪ TEXTĒ*, Kyoto 尚文堂.

この校訂本には、以下の写本が使用されている。

1. Mahāśītavatī (An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.)
2. Pañcarakṣā (An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.)
3. Pañcarakṣā (An der Universitäts-Bibliothek zu Kyoto.)
4. Pañcarakṣā (Gehörig zu Herrn J. Ischibama.)

・サンスクリット写本

M.1: [Matsunami1965] No.220, Pañcarakṣā

M.2: [Matsunami1965] No.225, Pañcarakṣā

T.1: [Takaoka1981] GA3, Pañcarakṣā

T.2: [Takaoka1981] CH47, Pañcarakṣā

(上記の写本には *rāhūla* (*rāhula*) のように、*u* と *ū* が不規則に交替している例が多く見られる)

・チベット語訳

P: 北京版チベット大蔵経 No. 308 *'phags pa be con chen po zhes bya ba'i gzungs*

D: デルゲ版チベット大蔵経 No.606 *'phags pa be con chen po zhes bya ba'i gzungs*

・漢訳

T: 大正新脩大蔵経 No.1392 『大寒林聖難拏陀羅尼經』 宋法天訳

1) 『大寒林陀羅尼』 内容構成

[0] 帰依文	[3] 寒林陀羅尼
[1] ラーフラ尊者の苦悩	[3.1] 目的
[1.1] 寒林における障り	[3.2] 陀羅尼前半部
[1.2] 世尊への謁見	[3.3] 陀羅尼後半部
[2] 世尊の問いかけ	[3.4] 陀羅尼の保持と効能
	[4] ラーフラ尊者たちの歓喜

2) 『大寒林陀羅尼』 和訳

[0] 帰依文

神聖な女神であるマハーシータヴァティー（大寒林）[陀羅尼] に帰依します²²。

[1] ラーフラ尊者の苦悩

[1.1] 寒林における障り

このように私は聞いた。

一時、世尊はラージャグリハに住していた。寒林の大屍林であるインギカと呼ばれる場²³において、その時、ラーフラ尊者はとても苦しんでいた。

デーヴァ²⁴（天）という障り²⁵によって、ナーガ（竜）という障りによって、ヤクシャという障りによって、ラクシャサ（羅刹）という障りによって、マルタ（風神）という障りによって、アスラという障りによって、キンナラという障りによって、ガルダという障りによって、ガンダルヴァ²⁶という障りによって、マホーラガという障りによって、人という障りによって、人ではないものという障りによって、プレータ（餓鬼）という障りによって、ブータ（死霊）という障りによって、ピシャーチャ（吸血鬼）という障りによって、クンバーンダ（鳩槃荼）という障りによって [傷つけられていた]。[また、] トラによって、カラスによって、フクロウによって、昆虫によって、地を這う虫によって、その他によって、また、人および人ではない²⁷衆生によって [傷つけられていた]²⁸。

[1.2] 世尊への訪問

そしてラーフラ尊者は、世尊が赴いている所、そのようなところに赴いた後に、世尊の御足に額づいて礼拝し、世尊を3度右繞した。その後、世尊の前で、[ラーフラ尊者は] 泣き、涙をこぼした。

[2] 世尊の問いかけ

そして世尊は、正に賢者ラーフラに仰った。

「ラーフラよ、何故あなたは私の前に立ち、涙を流しているのか？」

以上のように〔世尊から〕言われた時、ラーフラ尊者は世尊にこう答えた。

「世尊よ、今、私はラージャグリハの中の寒林の大屍林であるインギカ処という場所²⁹において住しています。それで私は、その場所において苦しめられているのです、世尊よ。デーヴァという障りによって、ナーガという障りによって、ヤクシャという障りによって、ラクシャサという障りによって、マルタという障りによって、アスラという障りによって、キンナラという障りによって、ガルダという障りによって、ガンダルヴァという障りによって、マホーラガという障りによって、人という障りによって、人ではないものという障りによって、プレータという障りによって、プータという障りによって、ピシャーチャという障りによって、クンバーンダという障りによって〔傷つけられています〕。〔また、〕トラによって、カラスによって、フクロウによって、昆虫によって、地を這う虫によって、その他によって、また、人および人ではない衆生によって〔傷つけられています〕³⁰。」

[3] 寒林陀羅尼³¹

[3.1] 陀羅尼の目的

そこで、正に世尊はラーフラ尊者に仰った。

「ラーフラよ、あなたは〔以下に述べる〕これらの大寒林という明呪を覚えなさい。四〔種〕の聴聞者たちの、ラクシャ（守護呪）³²による覆いで守護するために、また、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、そして一切衆生に〔守護呪の効能で〕長期にわたって財、利益、楽、繁栄をなし続けよ³³。」

[3.2] 陀羅尼前半部

それは次のようである。

さて、アンガ国³⁴、ヴァンガ国の者よ、カリンガ国の者よ、ヴァランガ国の者よ、サンサーラタランガよ、サーサダンガよ、施与者（バガ）、アスラよ、あるタランガよ、アスラの女勇者よ、タラ、女勇者よ、タラ、タラ、女勇者よ、作す、女勇者よ、作す、作す、女勇者よ、インドラ、インドラキサラよ、ハンサ、ハンサキサラよ、ピチマーラよ、マハーキッチャよ、傷つけるものよ、カールツチキー、アンゴダラ、ジャヤールカー、ヴェーラー、チンターリ、チリ、チリ、ヒリ、スマティ、ヴァステイ、チュル、ナッテー、チュル、チュル、ナッテー、チュル、チュル、チュル、ナッテー、チュル、ナーディ、ク、ナーディーよ、ハーリータキー³⁵よ、ハーリータキーよ、ハーリータキ

ーよ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ハーリータキーよ、ガヴリーよ、ガンダーラ族の女よ³⁶、チャンダーラ族の女よ³⁷、ヴェーターリーよ、マータンギー族の女よ³⁸、ヴァルチャシーよ、ダラニーよ、ダーラニーよ、タラニーよ、ターラニーよ、ウストウラマーリケー（水牛を殺す女）よ、カチャ、カーチケーよ、カチャ、カーチヴェー、チャウ、ナーティーケー、カーカリケー、ララマティ、ラクシャマティ、ヴァラーハクレー、マトパレー、睡蓮のような女（ウトウパラー）よ、作す女勇者よ、作す、作す、女勇者よ、タラ、女よ、タラ、タラ、女よ、為せ、女よ、為せ、為せ、女よ、チュル、女よ、チュル、チュル、女よ、マハーヴィーラーよ、イラマティーよ、ヴィラマティーよ、守護を為す女（ラクシャマティー）よ、一切の利益の成就よ、最上の真実の成就よ、妨げない女（アプラティハター）よ、インドラ王よ、ヤマ王よ、ヴァルナ王よ、クベーラ王よ、マナスヴィー竜王よ、ヴァースキ竜王よ、ダンダキー（光）王よ、ダンダアグニー王よ、持国天（ドゥリタラーシュトラ王）³⁹よ、増長天（ヴィルーダカー王）よ、広目天（ヴィルーパクシャ王）よ、千人の梵天の主である王よ、仏世尊である法王の王よ。

世の中に慈悲を示す無上の存在は、私と、また、一切衆生の守護を為せ⁴⁰。救い、保護し、守り、息災を〔なし〕、繁栄を〔与え〕、杖を取り除き、武器を取り除き、毒を取り除き、結界をはること、また、陀羅尼を〔身体に〕結びつけることを為せ。百年生き、百秋を見よ⁴¹。

[3.3] 陀羅尼後半部

それは次のようである。

イラー、ミラー、睡蓮のような女よ、イラマティー、ヴィラマティーよ、ハラマティーよ、守護を為す女⁴²よ、守護を為す女よ、為せ、為せ、マティ、フル、フル、プル、プル、チャラ、チャラ、カラ、カラ、クル (khuru)、クル、マティ、マティ、プーミチチャンダーよ、カーリカーよ、アビサンラーピターよ、サーマラターよ、フーラー、ストウーラーよ、ストウーラシカラーよ、ジャヤ、ストウーラーよ、ジャヤヴァターよ、ヴァーラ、ナッテー、チャラ、ナーディ、チュル、ナーディ、チュル、ナーディ、ヴァーグバンダニーよ、ヴィローハニーよ、サローヒターよ、アンダラーよ、パンダラーよ、カララーよ、キンナラ女よ、腕輪をつけた女（ケーユーラー）よ、ケートマティーよ、ブータンガマーよ、ブータマティーよ、裕福な女（ダニヤー）よ、吉祥の女（マンガルヤー）よ、黄金の子宮を持つ女（ヒラニヤガルバー）よ、大力（マハーバラ）の女よ、アヴァローキタムーラーよ、獯猛な不動の女（アチャラチャンダー）よ、ドゥランダラー、ジャヤーリカー、ジャヤーゴーローヒニーよ、チュル、チュル、プル、プル、ルンダ、ルンダ、ダレー、ダレー、ヴィダレー、ヴィダレー、ヴィスカンバニーよ、ナーシ

ヤニー、ヴィナーシャニーよ、バンダニーよ、モークシャニー、ヴィモークシャニーよ、モーチャニー、ヴィモーチャニーよ、モーハニー、ヴィモーハニーよ、バーヴァニー、ヴィバーヴァニーよ、ショーダニー、ショーダニー、サムショーダニー、ヴィショーダニーよ、サムキラニー⁴³よ、サムキラニー⁴⁴よ、サムチンダニーよ、サードウ、ツラマーナーよ、ハラ、ハラ、バンドウマティーよ、ヒリ、ヒリ、キリ、キリ、カラリ、フル、フル、クル、クル、ピンガラーよ、諸仏世尊に帰依します、スヴァーハー。

[3.4] 陀羅尼の保持と効能

これにおいて、実に、再度ラーフラは110⁴⁵の偈からなる大寒林〔陀羅尼〕の經典に、結び目を結んだ後に、手で持ち、首にかけた場合⁴⁶、周囲100由旬⁴⁷の〔範囲で〕守護されることになるだろう。塗香、花、そして印契によって〔供養を〕為すべきである⁴⁸。まさに、人や人ではないものは打ち勝たないだろう。

武器〔の害〕がなく、毒〔の害〕がなく、病気〔の害〕がなく、熱〔の害〕がなく、熱病〔の害〕がなく、呪い〔の害〕、ヴェーターラ（屍鬼）⁴⁹がなく、疫病〔の害〕がなく、火〔の害〕がなく、毒水によって死ぬことはないだろう⁵⁰。

明呪の実践において、一切を正しく実践をするが不完全な者たちに対しても成就を為す者（大寒林陀羅尼）である。一方で、完成した者たちに対してはよりいっそう高揚させる者である。

また、他の〔陀羅尼と〕結びついている者たちを〔自身の大寒林陀羅尼と〕結びつける者である。また、他の〔陀羅尼と〕結びついている者を解放する者である。

一切の病気、炎、障害を取り除く破壊者である。死、争い、不浄⁵¹を鎮める者である⁵²。

〔憑りついている〕障りが解けない場合は、〔障り自体の〕額がアルジャカの花房のように7つに裂けるだろう⁵³。また、マハーヤクシャの將軍である金剛手は、一つの炎になった燃え盛る火焰の金剛によって、額が裂ける程度に攻撃するだろう。四大天王の鉄製の輪によって、額が裂けるだろう。鋭利な小刀で突き刺すことによって、破壊するだろう。またその結果、ヤクシャ界から離れるだろう。アダガヴァティー大王都城において住処を得られない⁵⁴。

そこで正に、再度ラーフラは、マハーシータヴァティー大明呪の〔功德で〕ただちに解放された時に、王、賊、水、火、毒、武器、森、悪路の中に入った者⁵⁵は一切の恐怖から解放されるだろう。

正に再度、このマハーシータヴァティーの明呪は、91のガンジス河の砂と等しい〔数の〕諸仏、世尊によって、〔過去において〕成就が説かれ、〔未来において〕最上の成就が説かれ、また、〔現在において〕成就の強い力を説くだろう。

一切のデーヴァ、ナーガ、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ等によって、一切の勝者の眷属に囲まれた者（大寒林陀羅尼）が称賛された。

一切の恐怖や災害において、私と、そして、一切衆生の守護を為せ。

また、いつまでもあらゆる方法であらゆる方面からすべての立場の者たちにおいて、吉祥で、息災で、恐怖がなくなれ⁵⁶」

[4] ラーフラ尊者たちの歡喜

このことを世尊は説かれた。ラーフラ尊者、およびその一切の者と、デーヴァ、人間、アスラ、ガンダルヴァ⁵⁷を伴う世間は喜び、世尊によって説かれた無上正等覺⁵⁸に、大いに歡喜した⁵⁹。

以上で聖マハーシータヴァティーという名の明呪の女王を終結する。

¹ 写本および漢訳については次の通りである。

(以下で使用した表はそれぞれMatsunami 1965、塚本、松長、磯田編1989を基に筆者が作成した)

・サンスクリット写本

Takaoka ed. 1981 (仏教資料文庫) :

Pañca rakṣā A58, 100, 176, KA5, GA3, 6, 10,15, CA4,19, 74-5, CH47, 76, 139, 165, 196, 253,312,318, 340, 436, 437, 445, 544, 545-B, 546, 547, 564, 565, 572, DH38-A, 39, 61, 67, 72, 73, 83, 106, 112, 135, 157, 164,165, 259, 316, 324, 387, 402, 406, 426, 432, 436, JN3

Pañca rakṣā vidhi (vidhāna) CH288-A, 470, DH157

Mahāpratisarā DH18, 27, 87, 430

Mahāsāhasrapramardanī DH166

Matsunami 1965 (東大写本) :

以下の表はMatsunami 1965に記されている「Pañcarakṣā (五護陀羅尼)」としてまとめられている写本No.の対照表である。

(NN. =NewNumber, ON. =OldNumber, MN= Matsunami, Seiren (compiled).年代不明. *Catalogue of the Kawaguchi-Takakusu Collection of Sanskrit Manuscripts. Note-book 1-35.*)

NN.	ON.	MN vol. (page)	NN.	ON.	MN vol. (page)
220	276	14 (68)	227	444	15 (17)
221	286	16 (5)	228	450	31 (28)
222	288	15 (29)	229	452	25 (14)
223	289	15 (63)	230	455	31 (31)
224	291	15 (3)	231	482	15 (11)
225	334	15 (9)	232	568	不明
226	439	15 (6)	233	236	不明

Goshima・Noguchi 1983 (京大写本) :

Mahāpratisarā No.60, Mahāsāhasrapramardanī No.61, Mahāsītavātī No.62

また、Konshi 1990によると、カルカッタのAsutosh Museumに所蔵されている五護陀羅尼の写本は1105年にあたる年号を奥付にもち、南アジアにおけるネパール紙に書かれた紙本文書のなかで最古の例であるという。

・漢訳

『五護陀羅尼』として一括された漢訳は現存せず、それぞれ単独の經典として訳出されている。相当する漢訳は以下の通りである。

<i>Mahāpratisarā</i>	① 『普遍光明清淨熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼經』 唐不空訳 (大正蔵20、No.1153) ② 『随求即求大自在陀羅尼神呪經』 唐宝思惟訳 (大正蔵20、No.1154)
<i>Mahāsāhasrapramardanī</i>	『守護大千国土經』 宋施護訳 (大正蔵19、No.999)
<i>Mahāmāyūrī</i>	① 『仏母大孔雀明王經』 唐不空訳 (大正蔵19、No.982)
	② 『孔雀王呪經』 梁僧伽婆羅訳 (大正蔵19、No.984)
	③ 『大孔雀呪王經』 義浄訳 (大正蔵19、No.985)
	④ 『大金色孔雀王呪經』 失訳 (大正蔵19、No.986)
	⑤ 『大金色孔雀王呪經』 失訳 (大正蔵19、No.987)
	⑥ 『孔雀王呪經』 姚秦鳩摩羅什訳 (大正蔵19、No.988)
<i>Mahāsītavātī</i>	『大寒林聖難拏陀羅尼經』 宋法天訳 (大正蔵21、No.1392)
<i>Mahāmantrānusāriṇī</i>	『大護明大陀羅尼經』 宋法天訳 (大正蔵20、No.1048)

その他に『五護陀羅尼』として一括されたタングート・テキスト (11~15C頃) が現存する (Eric Grinstead1971, 9参照)。また、単独の經典のタングート・テキスト『孔雀王呪經』は、大正蔵No.982『仏母大孔雀明王經』に相当するという (Eric Grinstead1971, 1参照)。

² 『妙法蓮華經』 陀羅尼品第二十六 (大正蔵9、pp.58~59)、『正法華經』 総持品第二十四 (大正蔵9、p.130)、『妙法蓮華經』 普賢菩薩勸発品第二十八 (大正蔵9、p.61)

竺法護訳 (286年) 『正法華經』 に除災の機能を持つ陀羅尼が説かれていることから、呪としての陀羅尼の機能は遅くとも3~4世紀には付加されていたと推測されている。(塚本1989, 28-29)

³ それぞれの陀羅尼は次第に独自の尊格として神格化される例もみられ、『五護陀羅尼』もまた、それぞれの經典が女神として神格化され信仰された³。特に、11~12世紀頃編纂されたインド密

教の観想法儀軌『サーダナ・マラー (成就法の花環)』*Sādhnamālā* (以下、SM)、『ニシュパンナヨーガーヴァリー』*Niṣpannayogāvalī* (以下、NPY) が挙げられる。SMにおけるマハーシータヴァティー明妃 (Mahāśītavatī) に関する成就法はNo.200, 201, 206が該当する。No.200はマハーシータヴァティー明妃について単独で扱われ、No.201, 206は五護陀羅尼の各明妃が一括して扱われているマンダラについて説かれている。SMにおけるマハープラティサラ明妃の成就法については園田2014a、五護陀羅尼の成就法については園田2014b、園田2015を参照。

⁴ 塚本、松長、磯田編1989, 86、佐和1975, 209を参照。

『孔雀王呪経』について、田久保氏 (1972, 37) の校訂、岩本氏 (1975, 251) の和訳によると、陀羅尼部分に「マハープラティサラに幸いあれ、シータヴァナに幸いあれ、マハーシータヴァナに幸いあれ」との句があり、それぞれ『大随求陀羅尼』、『(大) 寒林陀羅尼』のことと考えられる。しかしながらその場合、『孔雀王呪経』が原型の成立が最も古いとの説に疑問が生じるが、漢訳の『孔雀王呪経』にはこの句が見当たらないことから、この句は後代の『孔雀王呪経』のサンスクリット・テキストに付加された可能性がある。

⁵ 五護陀羅尼は『大随求陀羅尼』、『守護大千国土経』、『大孔雀陀羅尼』、『大寒林陀羅尼』、『大護明陀羅尼』の順序で挙げられることが多く、理由は明確ではないものの上記の順序はほぼ一定していると見られている (岩本1937, 6、塚本1989, 64を参照)

⁶ 岩本1955参照。

⁷ Gergely, Hidas 2012によって、5本のギルギット写本、ネパール写本等を用いた『大随求陀羅尼』の詳細な校訂と英訳が発表された。

⁸ 奥山1998によると『大護明陀羅尼』は『根本説一切有部律』「薬事」に含まれている『ヴァイシャーリープラヴェーシャ』と内容がほぼ同じであるという。また、八尾2013によって「薬事」の日本語訳注が発表された。出土したギルギット写本の年代は5C末～7Cという (八尾2013, xvi)。

この「薬事」の終盤には「大孔雀の明呪についての現在物語」、「大孔雀の明呪についての前生譚」といった内容がある。『孔雀王呪経』との関連性については大塚氏 (2013, 481-482) によって指摘されている。

⁹ サンスクリット・テキスト、チベット語訳は現存しないという。(大塚2010, 147-169)

¹⁰ 求那跋陀羅訳『雑阿含経』、『別譯雑阿含経』、闍那崛多訳『佛本行集経』、阿質達霰訳『大威力烏樞瑟摩明王経』等で「寒林」という語が使用されている。

¹¹ 岩本1975, 379-380、および塚本、松長、磯田編1989, 90参照。

¹² 田久保1972, 37および岩本1975, 251参照。

¹³ 塚本、松長、磯田編1989, 90、中村1988, 644参照。

¹⁴ 塚本、松長、磯田編1989, 86、岩本1937a参照

『大寒林陀羅尼』以外の『五護陀羅尼』経典のうち、チベット語訳は『大随求陀羅尼』(北京版

No.179、デルゲ版No.561)、『守護大千国土經』(北京版No.177、デルゲ版No.558)、『孔雀王呪經』(北京版No.178、デルゲ版No.559, 560)、『大護明陀羅尼』(北京版No.181、デルゲ版No.563)がそれぞれ相当する。

¹⁵ 内容構成についてはIwamoto 1937b、および北京版 No.308、デルゲ版No.606を参照し、筆者が作成した。

¹⁶ grahaは「掴むこと、捉えること」等の意味である。ここでは、ヤクシャや羅刹に「とり憑かれること」と推測される。

¹⁷ サンスクリット・テキストには“*manuṣyāmanuṣa*”、チベット・テキストでは“*mi dang / mi ma yin pa*”漢訳では「人非人」とあるが、具体的に何を指しているかは不明である。

¹⁸ 岩本氏の校訂本では*vetāḍa*とあるが、*vetāla* (毘陀羅、起屍鬼)のことと思われ、死体に移り言葉を発するといいた動作をさせるものといわれている。

また、岩本氏(1975, 329, 387)によると、『守護大千国土經』にも表れるという。

¹⁹ *saptadhāsyā sphuṭen mūrdhā arjakasyeva mañjari* / 「頭がアルジャカの花房のように7つに裂けるだろう」(頭破作七分)

他の五護陀羅尼經典のうち『孔雀王呪經』『大千国土經』以外にも、『中阿含經』、『妙法蓮華經』、『大方等大集經』、『金光明最勝王經』等にもこの句が表れる。「頭が七つに裂けよ」とは『スッタニパータ』「彼岸道品」に宗教的権威を持つバラモンの言葉として用いられていたという。(中村1958, 210-217、植木2008, 418)を参照。

『スッタニパータ』の注解書である『パラマッタ・ジョーティカー』(村上・及川2009, 18)では、呪詛の作法として「牛糞を地面になすりつけて、花をまき散らし、草を敷き払い、左足を長口のある水瓶の水で洗って、七歩ほど行って、自分の足裏をこすって」とあり、その後、7日目にあなたの頭は7つに裂けてしまえとバラモンが告げたという。

さらに、この句で例えられる植物であるアルジャカ(*Arjaka*学名 *Ocimum ñratissimum*)は、『孔雀經』に属する不空訳『佛母大孔雀明王經』、義浄訳『佛說大孔雀呪王經』の中では「蘭香梢」と訳している。また、『金光明最勝王經』等においても同じ語が使用されている。一方で『中阿含經』、『妙法蓮華經』「陀羅尼品」では「阿梨樹枝」、『正法華經』では「華菜」、さらに『添品妙法蓮華經』では「摩利闍迦」と訳されている。訳語が明確ではないのは、どのような植物か不明であるためという(岩本1975, 376)。また、チベット語の*ar dza ka*は「cotton (綿)」の意とあり、まさしく綿花のように皮がはじける様子があらわされていると推測される。

²⁰ 『般若心經』の終結部分に(ラーフラではなくシャーリプトラが表れている等の違いはあるものの)ほぼ同一の場面がある。(渡辺2008, 付録35-36参照)

²¹ 渡辺(1995, 143)によると、南インドで生まれた「般若經」はドラヴィダ的な女性神崇拜と関連して発達し、『八千頌般若經』においては仏母として神格化されているという。

また、般若波羅蜜は5世紀までに神格化されたとされ、12世紀ごろ編纂されたSM No.151-159の

般若波羅蜜成就法では女神化した般若波羅蜜が説かれており、佐久間（2015）によって詳細に研究されている。

²² P, D: snags rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo 「一切の仏菩薩に敬礼する」

M.2: 「仏陀に帰依します」と続く。

²³ IW: inḡhikāyatanapratyūddeṣe, M.1: inḡhikāyatanapratyūddeṣe, M.2: inḡhikāyane pratyūddeṣe,

T.1: inḡhikāyatane pratyūddeṣo

大塚（2010, 160）によると、インギカ処は王舎城（ラージャグリハ）の外れにある場所という。

²⁴ デーヴァ、ナーガ、ヤクシャ、ガルダ、ガンダルヴァ、キンナラ、マホーラガの7尊は、仏教を守護するという八部（神）衆に属するものという（岩本1975, 376）。しかしながら、ここではラーフラを悩ませる鬼神としてあらわされている。チベット・テキストには以上の7尊にアスラが加わり、八部衆全員が述べられている。

²⁵ grahaここでは、ヤクシャや羅刹に「とり憑かれること」と推測される。詳しくは注16参照。

²⁶ 漢訳にはない。

²⁷ 具体的に何を指しているかは不明である。詳しくは注17参照。

²⁸ ここで列挙されている鬼神や動物の種類や数、順番は、使用したテキスト間でそれぞれ相違があった。具体的には、校訂テキストIWと比較すると、サンスクリット・テキストM.1ではキンナラとアスラの順が前後しており、M.2ではアスラを欠いている。また、T.1 およびT.2ではデーヴァからラクシャサまでが共通、以降はキンナラ、マルタ、ガルダ、ガンダルヴァの順で表れ、次のマホーラガ以降はおおむねIWと共通している。P, Dでは「デーヴァ、アスラ、ナーガ、ヤクシャ、ラクシャサ、キンナラ、マホーラガ、ガンダルヴァ、人、マルタ、霊、ブータ、ピシャーチャ、クンバーンダ、フクロウ、カラス、ヒョウ、虫、サソリおよび蛇 (sdig sbrul)、人、人ではない者」、Tでは「天（デーヴァ）、龍（ナーガ）、薬叉（ヤクシャ）、羅刹（ラクシャサ）、緊捺囉（キンナラ）、夔嚕荼（ガルダ）、摩護囉譏（マホーラガ）、人、非人、餓鬼（プレータ）、部多（ブータ）、比舍佐（ピシャーチャ）、供畔拏（クンバーンダ）、烏（カラス）、鵲（カササギ）、獺狐（フクロウ）、豺、狼、蟲、蟻」と記されている。

²⁹ T.1: inḡhikāyāzatanūpratyūddeṣe 「人気がなく、やせ細ったインギカという場所」

³⁰ [1.1] と同様に、鬼神等の種類や順番が前後している。校訂テキストIWと比較すると、M.1ではヤクシャ、マルタ、アスラ、ラクシャサの順で述べられている。M.2ではピシャーチャ、ブータの順になっており、また、[1.1] ではアスラを欠いていたが、ここでは登場している。T.1ではナーガ、マルタ、ラクシャサの順で述べられており、アスラを欠いている。T.2ではナーガ、マルタ、アスラ、ヤクシャ、ラクシャサ、キンナラ、ガンダルヴァ、マホーラガの順で説かれており、マホーラガ以下はIWとおおむね共通している。P, Dでは [1.1] とおおよそ同様であるが、ガンダルヴァ、マホーラガの順になっており、一部前後している。Tは [1.1] と同。

- ³¹ 陀羅尼呪（[3.2]、[3.3]）に関しては、サンスクリット・テキスト、チベット語訳、および漢訳のいずれにおいても異同が多くみられるが、ここではIWを基本とする。
- ³² ここでは大寒林陀羅尼のことと思われる。
- ³³ IW他サンスクリット写本ではsarvasatvānām ca dirgharātram arthāya hitāya sukhāya yogakṣemāya bhaviṣyati //とあるが、文脈からP, D のyun ring po'i don dang phan pa dang bde bra 'gyur ba 'di zung shig |の訳を採用した。
- ³⁴ 『守護大千国土經』にも表れる。（岩本1975, 338-339）
- ³⁵ 黄色いミロラバンの樹
- ³⁶ 『孔雀王呪經』、『パルナシャバリー陀羅尼』に表れる、インドの民族名。この民族が厄病をもたらすものと信じられ遠ざけるために使用されたのか、もしくはこの民族が特殊な力を持つと信じられ厄病をはらうことを祈念するために用いられたのか、その意図は明確ではないという（岩本1975, 13）。また、この語は『法華經』「陀羅尼品」において、ヴィダールカ王が説いた説法者を守るための陀羅尼呪の中に表れる。
- ³⁷ 上記注参照。薬師如来の真言にもあらわれる。「oṃ huru huru cāṇḍāli mātangi svāhā」（岩本1975, 13）
- ³⁸ 上記注参照。
- ³⁹ 四天王の一人。東方は持国天Dhṛtarāṣṭra、南方は増長天Virūḍhaka、西方は広目天Virūpākṣa、北方は多聞天Vaiśravaṇaが司る。今回使用したサンスクリット・テキストには多聞天は現れない。
- ⁴⁰ IW: mama sarvasatvānām ca rakṣām karotu/
M.2: mama saparivārasya sarvvasatvānām ca rakṣām kūrṅvantu guptim 「私の、伴った従者の、そして一切衆生のラクシャー（陀羅尼）の守護を為せ」
T.1: mama saparivārasya sarvvasatvānā ca rakṣā kūrṅvantu jivantu guptim
T.2: mama sarvasarvasatvānām ca rakṣām kūrṅvantu guptim
- ⁴¹ P,Dではthugs brtse ba bla na med pas bdag la bsrud du gsol/ yongs su bsyab a dang / yongs su gzung ba dang / yongs su bskyab pa dang / zhi ba dang bde legs su 'gyur ba dang / chad pa spang ba dang / mtshon cha sbang pa dang / dug gsad pa dang / dug gzhi pa dang / mtshams gcad pa dang / sa bcing pa mdzad du gsol / tadyatha'…と続く。
また、「百年生き、百秋を見よ」という表現は、『孔雀王呪經』等にも見られる田久保氏（1972, 13, 15-17）の校訂テキストおよび岩本氏（1975, 227, 230-33等）の和訳に、頻出している。
- ⁴² 岩本氏の校訂本にlakṣamatiとあるが、その注記にrakṣamatiとある。
- ⁴³ saṃkhiranṇi
- ⁴⁴ saṃkiranṇi
- ⁴⁵ IW, T.1, T.2, M.1, P, Dには110、Tには108とある。
- ⁴⁶ 陀羅尼を身体に結び付けるといふ呪術的行為（結呪作法）といわれる。（大塚2010, 150）

⁴⁷ IW: *yojanaśatasya rakṣākr̥tā*, M.2, T.2 : *yojanaśatasahasraya rakṣākr̥tā*, P, D: *dpag tshad bcu*, T.1: *yojanaśataṃ sahasrāṣṭasya rakṣākr̥tā*となっている。

⁴⁸ P, D では *kun nas dpag tshad bcu khor yug tu be con rnams dang /me tog rnams dang / phyag rgya rnams kyis de bsrung ba byas par 'gyur ro //* 「あまねく所から10ヨージャナの周囲に一切の杖、花、印契によって [供養し]、守護せよ」とある。

IWとT.1では「塗香」「花」「印契」、M.2では「塗香」「花」「印契」「灯明」、P,Dでは「杖」「花」「印契」とあり、相違が見られるものの、それらを用いた儀礼的行為が共通して述べられていると推測される。一方でM1およびTではこの行為を欠いているが、欠いた状態でも前後を通して意味は通じることから、この儀礼的な行為は後に付加された可能性も推測される。

⁴⁹ 岩本氏の校訂本では *vetāḍa* とあるが、*vetāla* (毘陀羅、起屍鬼) のことと思われる。死体に移り、言葉を発するといった動作をさせるという。また、『守護大千国土經』にも表れる。(岩本1975, 329, 387)

⁵⁰ T.1: *na viṣaṃ na śāstra na gara na rogaṇaṃ jvala na vidyāmantra na vetāḍa na vyādhi nāgnī na viṣaṃ dake kālaṃ kaliṣyati// na vidyānāvidyāmantraprayoge śvasarveśāṃ viṣamantraprayogānāṃ ca siddhakāri sarvvaśāsādhūpayūktānāṃ ca vaddhaṇi aiddhānāṃ siddha// karisiddhānāna //*

⁵¹ T.1: 「一切の死、争い、不浄を」

⁵² M.1: 「一切の障りを解放する者である」と続く。

⁵³ *saptadhāsyā sphuṭeṇ mūrdhā arjakasyeva mañjarī /* 「頭がアルジャカの花房のように7つに開くだろう」(頭破作七分) 『孔雀王呪經』 『大千国土經』 以外にも、『中阿含經』、『妙法蓮華經』、『大方等大集經』、『金光明最勝王經』 等にもこの句が表れる。また、宗教的權威を持つバラモンの言葉として用いられていたという。詳しくは注19参照。

⁵⁴ アータナーティヤ經にも同じ表現がみられるという。(大塚2010, 166)

⁵⁵ SM No.206にも同様の表現が表れる。(園田2015参照)

IW: *madhyagata*, M.1: *caṭūrgamadhyagata* 「四つの中央の道 (四辻)」, M.2: *durgamadhyagata* 「通ることが困難な道」

⁵⁶ M.2: 「一切の恐怖や災害に対して、私の、伴った従者の、そして一切衆生の、恐れがなく、また、永久にあらゆる方法であらゆる方面から、すべての立場の者たちに、吉祥で息災のラクシャー (陀羅尼の守護) を為せ」

⁵⁷ M.2ではアスラの後にガルダが追加されている。

⁵⁸ サンスクリット・テキストには *samyaksambuddha* (三藐三仏) とあるが、「三藐三菩提」、「無上正等覺」と同義と推測した。

⁵⁹ 『般若心經』の終結部分にほぼ同一の場面がある。詳細は注21参照。

<参考文献>

(日本語文献)

1. 『大正新脩大藏經』 Vol. 21 No. 1392 法天譯「大寒林聖難拏陀羅尼經」
2. 岩本裕1975『佛教聖典選 第七卷 密教經典』読売新聞社.
3. 植木雅俊2008『梵漢和对照 現代語訳 法華経 下』岩波書店.
4. 大塚伸夫2010「『檀特羅麻油述経』に見る初期密教の特徴」『高野山大学密教文化研究所紀要』第23号, 高野山大学大学院, 147-169.
5. ———. 2013『インド初期密教成立過程の研究』, 春秋社
6. 奥山直司1998「初期密教經典の成立に関する一考察—『マハーマントラヌサーリニー』を中心に—」松長有慶編『インド密教の形成と展開』法藏館, 67-86.
7. 佐久間留理子2014「ネパール仏教絵画に見る観自在菩薩」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 1108-1117.
8. ———. 2015「般若波羅蜜成就法の研究—バクタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』151, 156番を中心に—」『東海佛教』60, 東海印度学佛教学会, 150-164.
9. 園田沙弥佳2014a「『成就法の花環』におけるマハープラティサラー成就法」『東洋大学大学院紀要』50, 東洋大学大学院, 101-123.
10. ———. 2014b「『サーダナ・マーラー』における五護陀羅尼の成就法」『印度學佛教學研究』63 (1), 日本印度学仏教学会, 435-438.
11. ———. 2015「『サーダナ・マーラー』No.206「五護陀羅尼成就法」について」『東洋大学大学院紀要』51, 東洋大学大学院, 127-147.
12. 田久保周譽校訂1972『梵文孔雀明王経』山喜房佛書林.
13. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編1989『梵語仏典の研究 IV密教經典編』平楽寺書店.
14. 東京国立博物館2015『特別展コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』日本経済新聞社.
15. 中村元訳注1958『ブッダのことば—スッタニパータ』岩波書店.
16. 村上真完、及川真介訳注2009『仏のことば註: パラマッタ・ジョーティカー』春秋社.
17. 渡辺章悟1995『大般若と理趣分のすべて』北辰堂.
18. ———. 2008『般若心経——テキスト・思想・文化』大法輪閣.
19. 八尾史2013『根本説一切有部律薬事』連合出版, 123-128
20. 山口しのぶ2008「カトマンドゥ盆地のナーマサンギーティー文殊について」『東洋大学文学部紀要 印度哲学科編』第61集, 148-170

(外国語文献)

21. Bhattacharya, Benoytosh., ed. 1968a. *Sādhnamālā* vol II. Baroda.
22. ———. 1968b. *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta.
23. Eric, Grinstead. 1971. *The Tangut Tripitaka part.6*, University of Toronto.
24. Gergely, Hidas. 2012. “*Mahapratisara Mahavidyaraṇi: Critical Edition with Annotated Translation: The Great Mulet Queen of Spells.*” New Delhi.
25. Goshima, Kiyotaka and Noguchi, Keiya. 1983. *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters*. Kyoto University. compiled by K. Goshima and K. Noguchi, Kyoto.
26. Iwamoto, Yutaka. 1937a. *Beitrag zur Indologie ; Heft1 Mahāsāhasrapramardanī (pañcarakṣā I)*. Kyoto尚文堂.
27. ———. 1937b. *Beitrag zur Indologie ; Heft2 KLEINERE DHĀRAṆĪ TEXTE*, Kyoto尚文堂.
28. Konishi, Masatoshi. 1990. “Old Paper Used for Asutosh Museum Manuscript of *Pañcarakṣā.*” *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies No.2*. New delhi.
29. Lokesh, Chandra. 2003. *Dictionary of Buddhist Iconography Volume7,9*. International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan. New Delhi.
30. Matsunami, Seiren (compiled). 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library* (『東京大学附属図書館所蔵 梵文写本解説目録』). Tokyo.
31. ———. (compiled). 年代不明. *Catalogue of the Kawaguchi-Takakusu Collection of Sanskrit Manuscripts. Note-book 1-35*.
32. Peter, Skilling. 1994. *Mahasutras: great discourses of the Buddha volume1*. Oxford.
33. Takaoka, Hidenobu ed. 1981. *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal vol.1*. Buddhist Library. Fukuoka.

【謝辞】

松濤カタログ（参考文献30）、および松濤ノート（参考文献31）の閲覧にあたり、東京大学の斎藤明教授、東京大学インド哲学仏教学研究室の方々には大変お世話になった。また、論文要旨の英訳に際しては、フルブライト研究員（2015年6月当時）として東洋大学で研究されていたMark R. Bookman氏からご助言を頂いた。ここに謝意を表します。

Mahāśītavatī* in the *Pañcarakṣā

SONODA, Sayaka

Mahāśītavatī is a Buddhist scripture associated with the *Pañcarakṣā*, a unit of five dhāraṇī. The scripture illustrates how Rāhula was confronted by many kinds of demon in addition to wild animals, humans, and other beings during a spiritual retreat. The Buddha taught Rāhula a series of mantras which would protect him against forces that would bring about an untimely death such as weapons, water, fire, demons, spells, plague, and poison, amongst others.

It is said that the chanting of this incantation would also provide a benefit for all living beings.

I have tried to present in this paper the key features of the *Mahāśītavatī* and have also included a Japanese translation of the text.

Keyword:

Tantric Buddhism, *Pañcarakṣā*, *Mahāśītavatī*, Rāhula